

第2回連続講座「『いのち』を考える」講師プロフィール

日程	講師（敬称略）	プロフィール
10/3 (水)	柳田 邦男(やなぎだくにお) 作家、評論家	1936年栃木県生まれ。1995年『犠牲〔サクリファイス〕 わが息子・脳死の11日』とノンフィクション・ジャンル確立への貢献が高く評価され菊池寛賞受賞。災害・事故・公害問題や、生と死、言葉と心の危機、子どもの人格形成とメディア等の問題について積極的に発言している。主な近著に『生きなおす力』『新・がん50人の勇気』『僕は9歳のときから死と向きあってきた』『「想定外」の罫 大震災と原発』がある。
10/10 (水)	鷲田 清一(わしだせいいち) 哲学者、大谷大学教授、 前大阪大学総長	京都大学文学部卒業。同大学院修了。関西大学文学部教授、大阪大学大学院文学研究科教授、大阪大学理事・副学長、総長を経て現職。これまで哲学の視点から、身体、他者、言葉、教育、アート、ケアなどを論じるとともに、さまざまな社会・文化批評をおこなってきた。主な著書に、『「聴く」ことの力』『老いの空白』『「待つ」ということ』『死なないでいる理由』『語りきれないこと』など多数。
10/17 (水)	土師 守(はせまもる) 「淳」著書	神戸大学医学部卒業。放射線科医師。現在兵庫県内の公的病院に勤務。1997年、神戸連続児童殺傷事件により、当時小学校6年生だった次男、淳君を失う。1998年、『淳』を発表。全国犯罪被害者の会（あすの会）副代表幹事、NPO法人ひょうご被害者支援センター役員。
10/24 (水)	高 史明(こさみよん) 作家、評論家	在日朝鮮人二世。高等小学校中退後、独学、さまざまな職業を経て、作家生活に入る。1975年日本児童文学者協会賞、第15回青丘賞、1993年第27回仏教伝道文化賞受賞。主な著書に『生きることの意味』『高史明親鸞論集』（全3巻）『現代によみがえる歎異抄』『高史明の言葉 いのちは自分のものではない』『いのちと責任 対談 高史明・高橋哲哉』がある。
10/31 (水)	上田 紀行(うえだのりゆき) 東京工業大学リベラルアーツ センター教授、「生きる意味」 著者	文化人類学者。東京大学大学院修了。「癒し」という言葉を日本社会に送り出し、日本社会の不自由さからの解放を主張する。著書『生きる意味』は大学入試出題数第一位の著書となる。21世紀社会の展望についてダライ・ラマと対談（『ダライ・ラマとの対話』）するなど、提言を続けている。
11/7 (水)	青木 新門(あおきしんもん) 作家、詩人	早稲田大学中退後、富山市で飲食店「すからべ」を経営する傍ら文学を志す。吉村昭氏の推挙で「文学者」に短編小説「柿の炎」が載るが、店が倒産。1973年冠婚葬祭会社（現オークス）に入社。専務取締役を経て、現在は顧問。1993年葬式の現場の体験を「納棺夫日記」として著しベストセラーとなり全国的に注目される。2008年に「納棺夫日記」を原案とした映画「おくりびと」がアカデミー賞を受賞して再び注目される。
11/14 (水)	梶田 叡一(かじたえいいち) 兵庫教育大学名誉教授(前学 長)	鳥取県米子市で小・中・高校を卒え1964年京都大学文学部哲学科を卒業。文学博士。国立教育研究所主任研究官、日本女子大学助教授、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長、環太平洋大学学長などを歴任。大阪府私学審議会会長、国立教育政策研究所評議員、放送大学番組審議会議員、鳥取県県政顧問も務める。研究の中心は自己意識心理学であるが、1971年以降シカゴ大学ブルーム教授との出会いを機縁に多面的な教育研究にも精力を注ぐ。
11/21 (水)	村上 典子(むらかみのりこ) 神戸赤十字病院心療内科部長	1987年関西医科大学医学部卒業。5年間の内科医としての経験を経て、1992年から関西医科大学心療内科、1996年から神戸赤十字病院心療内科、2003年から同部長。
11/28 (水)	日野原重明(ひのばるしげあき) 聖路加国際病院理事長	1937年京都帝大医学部卒業。1941年聖路加国際病院の内科医となり、内科医長、院長等を歴任。現在、聖路加国際病院名誉院長・理事長、聖路加看護大学名誉学長他公職多数。2005年文化勲章。日本に米国医学を導入した第一人者。患者参加型医療・予防医学・終末医療の推進など画期的な医療改革に貢献し、医学・看護教育にも貢献した。現在は「新老人運動」を提唱し2000年に「新老人の会」を結成、会長を務める。いのちの大切さと平和を小学生4年生を中心に伝える「いのちの授業」を展開中。
12/5 (水)	高木 慶子(たかきよしこ) 上智大学特任教授、上智大学 グリーンケア研究所所長	聖心女子大学文学部心理学科卒業。上智大学神学部修士課程修了。博士(宗教文化)。生と死を考える会全国協議会会長、兵庫・生と死を考える会会長。援助修道会会員。二十数年来、終末期にある人々のスピリチュアルケア、及び悲嘆にある人々の心のケアに携わる一方、学校教育現場で使用できる「生と死の教育」カリキュラムビデオを制作。幅広い分野で全国的にテレビや講習会で活躍中。著書として『大切な人をなくすということ』『悲しみの乗り越え方』『悲しんでいい～大震災とグリーンケア～』など多数。